

佳作

農業と途上国の発展

帯広農業高校

上面 那南美

私は2014年11月に、学校でJICAの国際交流を行いました。アフリカの方々が多数来ていて、皆さん自分の国に日本の技術を持って帰ろうとしているようで、私たちの話を熱心に聴いてくださいました。

まず始めに、私たちの一年間カボチャ栽培の研究成果の発表を聞いていただきました。雪化粧、えびす、くりあじ、ほっこり133の4種類を班ごとに栽培しました。カボチャを播種から収穫まで自分達で行うことによって農業の基礎を勉強しました。熱心に聴いてくださっていて、嬉しかったです。

次に、グループごとに分かれて意見交換などをしました。マラウイ、ガーナなどの国から来た3人の方と交流しました。皆さんが共通して言っていたことがありました。それは「国が貧しい」ということです。アフリカの国々はほとんどが発展途上国です。そのため農業の技術も発展するのが遅く、農業を営みながら生計を立てている国では、農業の発展が国の発展に直結してきます。しかし、国が貧しく、加工の機械などがないため、技術が上がらず、どうしても収穫後そのままの状態では他国に売るしかなくなってしまいます。加工していないものは価値が下がってしまいます。しかし、生産して出荷し続けるしかないのですが、トラクターなどの機械は無いので、人が必要になってきて、小さな子どもも畑に出て毎日作業します。お金がない、人手がいる、などの理由から、学校に通う子どもが減り、文字が読めず、一般的な知識がない子どもが増え、現在では、その子どもたちが大人になり始めています。そのため、日本から農業が発展するために指導しに行っても理解してもらえずにいます。この悪循環が、加工や農業の技術を進歩させる足かせになっています。六次産業化を目指していると言った方は、この悪循環をなんとか解消させない限りは、六次産業化は、難しいと教えてくださいました。この悪循環を解消するためには、先進国が援助をして、先進国では当たり前前の省力化、つまり農業機械の導入をするべきではないかと考えます。機械の導入をすることについて、教えることが難しいという問題が発生するかもしれません。しかし、前述したとおり、悪循環はいつか断ち切らなくてはなりません。先進国はそのための援助や努力を惜しまずに、さらに進めてほしいです。

最後に、私たちの夢などについて、アドバイスをくれました。そして、三人は皆に「一人でも多くの農業従事者が増えるといいので、ぜひ農業をしてください。」とっていました。

最近よく聞く、六次産業化。私たち日本では加工技術など様々な面で、実現は不可能ではなく、私が通う帯広農業高校でも一部行っています。しかし、日本とはまったく違う環境のアフリカではそう簡単にはいきません。加工をすることが出来る人材の育成や、農業の技術の進歩など、課題がたくさんあります。私たちは、そんなアフリカの人々のために何が出来るのでしょうか。私一人だけでは、何もすることはできません。しかし、今回の交流や発展途上国に訪問し、発展するような指導をしているJICAの活動には意味があると思います。

この JICA の活動に参加し、お手伝いすることが、一人では何の力にもなれなかった私にもできる唯一のことではないかと思えます。交流することで、当たり前になっていた日本の技術の素晴らしさがわかり、そのことを再発見することが出来ると同時に伝えることができると思うからです。今は、自分に出来ることはわずかですが大人になったらいつかアフリカの国々に行き、少しでも力になりたいです。「わずかな力もたくさん集まれば大きな力になる。」この言葉を信じて活動していきたいと思えます。